

「消化器癌の診断と内科治療— 1. 食道・胃・大腸」

北里大学名誉教授 岡部 治弥 監修
北里大学教授・内科 西元寺克禮
前横須賀共済病院内科部長 谷口 猛 編集
北里大学客員教授 柴田 久雄
北里大学助教授・内科 勝又 伴栄

京都がん協会

多 田 正 大

消化器癌の診断と治療は臨床医に課せられた重要な命題である。そのためには病変を忠実に表現する明快な画像を得る技術を修得すること、それを適正に読影する洞察力と経験がなければならない。本書が企画された経緯については、編者の1人である西元寺克禮教授の長い序文に述べられているが、最近軽視される傾向にある消化器癌の画像診断の基礎を再び世に広める目的で、北里大学内科グループの総力を傾注して完成したものである。“研究を重要視する大学病院では、消化器の画像を読影する基礎を伝授してもらえない……”，若い臨床医の嘆きの声を耳にすることが多いが、北里大学グループは伝統的に画像診断を重要視する、今どき珍しい教室である。

あえて紹介するまでもなからうが、北里大学内科は27年前に岡部治弥教授によって興され、消化器内科として常に学会を活性化させてきた功績の大きいグループである。現在は二代目の西元寺教授に受け継がれているが、画像診断にける真摯さは他に類をみない教室である。X線・内視鏡・病理所見を詳細に対比することから始まり、典型的な癌の

画像所見のポイントを窮めた後、非典型的な病変の診断へ応用する手順を頑ななまでに一貫しており、その独特の診断学は国内外から注目されている。

本書はこのような気風の教室から生まれた書籍であるから、呈示されている画像の質は一級品である。執筆者たちはいずれも画像診断のプロであり、随所に配されたX線・内視鏡・病理写真などは一流の輝きを持つ優れ物ばかりである。圧倒的な迫力で読者に迫り来る。膨大な臨床症例を集大成したものであり、豊富な経験に裏付けされた診断手順と画像は読者に訴える説得力が大きい。

本書の構成として、各臓器ごとに癌の疫学、症候、頻度などを記述した後、画像診断から治療、予後へと記述するスタイルが踏襲されている。われわれはとかく患者背景を忘れて、画像一本で読影するきらいがあるが、消化器科診療の基本的な事項の重要性について、さりげなく読者の注意を喚起している。随所にトピックスとして最新の消化器癌の知見を挿入しており、診断学の基礎から最近の話題まで、非常に読みやすい書籍に仕上がっている。さすがに

書籍造りに手慣れた医学書院の本である。

本書では悪性リンパ腫についても多くの紙面を割いている点が特筆される。癌と悪性リンパ腫の鑑別、生検すればそれまでであるが、X線や内視鏡診断のうえからは鑑別が問題になる。北里グループは多くの悪性リンパ腫症例を集積していることで有名であるが、さすがに揚げられたデータと画像には重みがあり注目される。

食道・胃・大腸癌の形態診断はかくあるべき、われわれ消化器科臨床医にその方向性を教えてくれる名著である。それだけに続編として企画されている肝胆膵癌の発刊が期待される。二部作が完成した暁には、まさに今日の消化器癌診療の最高の指導書として、多くの臨床医にインパクトを与えてくれるであろう。今から次の書籍が楽しみである。

● B5 頁292 図46 写真135
カラー写真362 色図17 表108
1998 定価(本体23,000円+税)
〒400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)